

藤井寺市

歴史資産を活かしたまちづくりを目指して

～市民生活に密着した歴史空間の創出～

藤井寺市に足跡を残す貴重な歴史遺産

藤井寺市は古代文化発祥の地のひとつであり、金剛・和泉山系に源を発する石川と大和盆地から流れ出る大和川との合流点の西側に段丘地形が発達し、この段丘面に巨大な古墳が築造されました。これらは古市古墳群とよばれ、墳丘長400mを超える巨大な前方後円墳をはじめ、墳丘長200mを超える6基を含む44基の古墳が存在しています。5世紀前後の倭国王を中心とした支配者層の権力の強大さを示す古墳文化を代表する資産であり、現在、隣接する百舌鳥古墳群とあわせて世界文化遺産登録をめざしています。



また、代表的な社寺として、学問の神様・菅原道真の遺品とされる文化財を数多く所蔵し梅園で有名な道明寺天満宮や、西国33箇所観音霊場の第5番札所として巡礼者で賑わう葛井寺、道真公が、叔母で住職でもあった覚寿尼と別れを惜しんだといわれる道明寺などがあります。

そして、古代から和泉・河内・大和を結ぶ主要道となっていた長尾街道や、京都から高野山へ通じる参詣道として栄えた東高野街道をはじめとする数多くの古道が残っています。

古墳や旧街道、社寺等を活かした歴史街道マスタープラン

本市では、このような背景を受けて、市への理解を深めてもらえるようなふれあいの場やレクリエーションの場となる歩行者系ネットワークの形成を目指した「歴史街道マスタープラン」を策定しました。

市域では、古くからの生活軸である長尾街道や東高野街道が通じ、今も古い町並みや道標などその名残が見られます。また、数多くの古墳や、有名な社寺も存在しています。このマスタープランでは、生活空間として市民に密着した市のシンボルとなるよう、軸となる旧街道とともに古墳や社寺等を拠点として位置づけし、歴史文化環境の創出をめざしています。

歴史資産をめぐる歩行者系ネットワークの創出

土師ノ里駅周辺では、渋滞解消・放置自転車対策・駅前空間の創出・駅や周辺地域のバリアフリー化を目的に、大阪府・近畿日本鉄道(株)・藤井寺市の3者が協力し、平成8年度より整備を進めています。昨年度より駅舎の移転新築工事が本格的に動き出し、今後、駅周辺のバリアフリー化や駅前広場の整備が進むことから、歴史街道マスタープランをもとに、道明寺地区や国府地区を含む周辺地域において交通弱者や観光客が安全に安心して歩ける歩行者系ネットワークを整備することとしています。

これらの地域は市の東部に位置し、遺跡や史跡、古墳などが数多く点在し、南北に通る東高野街道と東西に通る長尾街道が地域内で交差しています。また、北部の国府遺跡は河内文化発祥の地であり、南部では道明寺天満宮や道明寺の門前町として発展してきました。しかし、狭い地域でありながらこれら

の歴史資産の連携が乏しく、地域の特性を十分に活かしかれていないとは言えません。さらに、地域内の生活道路は狭小な道路が張りめぐらされており、高齢化の進展と相まって安全で安心な歩行空間が確保されているとは言えません。

そこで、歴史資産を保全・活用し、土師ノ里駅と道明寺駅の間を歴史的な魅力でつなぐ「歴史回廊」の整備を図ることで、市民には歴史空間の中での生活を再認識してもらい、訪れる人には地域の特性を最大限に発信できるものとなるよう、誰もが安全で安心して歩いてまわれるバリアフリー化を図ることを目的に、今年度より5カ年でまちづくりを進めています。

目標を達成するための具体的な事業としては、東高野街道や関連道路の歴史的景観に配慮した整備、歴史的資産へ導くための案内サインや道標の設置、鍋塚古墳、助太山古墳の景観を重視した保護整備、そしてモニュメントの設置、道路用エレベーターを備えた土師ノ里駅前広場の整備などを行っています。

住民の発想を活かしたまちづくり

これらの整備は、地域住民の日常生活に密着したものであり、郷土に対する理解と愛着心を高めるものでなければなりません。地域住民が誇りをもてるまちづくりは、訪れる人々の心に響き、生き活きたまちとして写りこむことでしょう。

そこで、地域の特性を活かした整備計画を検討するため、地域住民や事業者、学生に参加をいただき、「まちづくりワークショップ」を開催しました。ワークショップでは、「歴史あるまちのエエところを見つけよう」と、まち歩きからはじめ、良いとこ



ろと悪いところを再発見しました。そして大事にしたいことを確認したあと、「こんなことができたらいいな」との思いを整備イメージとして作り上げ、次に具体的デザイン等の検討やバリアフリー化など課題解決の検討も行いました。

最初のうちは「夢みたくない話をしても時間の無駄だ」、「どうせ市役所はできないだろう」と言う反対意見も出ました。しかし、回を重ねるにつれ参加者の意識が、受身から積極的なものへと変化してきたのです。自分たちのまちは自分たちで創るんだという意識の芽生えとともに、地域でできることについてもたくさんの意見が出されました。



今後は、市が整備すべきこと、住民がすべきこと、協働ですべきことなどをひとつの整備方針としてまとめていきます。これらの中には5年ではできないこともあるでしょう。しかし、住民のまちづくりへの想いは確実に心に刻み込まれていくでしょう。

本市では、世界文化遺産登録を目指すために、古墳と周辺地域を一体的に保護するためのバッファゾーンの設定などが必要となります。周辺住民には、景観などで一定の制限がかかることになるのですが、今回のワークショップでの取組を広げていくことにより、押し付けの規制ではなく、自らが古墳との調和や保全を図っていこうという意識が、醸成されるものと確信しています。